

# “童心の詩人”野口雨情の終焉の地 鶴田町の羽黒山麓

栃木県立博物館 主任研究員 小柳 真弓



昭和40年代の雨情旧居の様子(個人蔵)

盛んに車が行き交う宇都宮環状道路、通称「宮環」。JR宇都宮駅を中心にほぼ円形をなす交通の大動脈の真西、鹿沼街道を跨ぐ陸橋は「雨情陸橋」と名付けられている。そこから西のほど近いところに、童謡・民謡詩人として名を馳せた野口雨情の旧居があることが由来だ。昭和初期に建てられたこの建物は、近隣住民の努力で維持管理・保存され、鹿沼街道の拡張にともなう現在地への移転を経て、国登録有形文化財となっている。

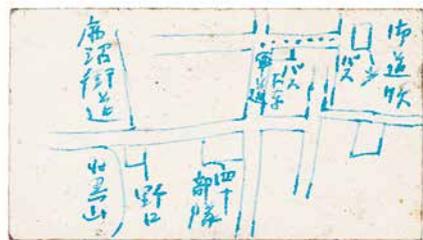
童謡「七つの子」「赤い靴」「シャボン玉」などで知られる雨情は、明治15(1882)年に茨城県の磯原(現・北茨城市)で生まれた。鈴木三重吉の『赤い鳥』と並んで童謡界を牽引した児童雑誌『金の船』『金

の星』などに次々と童謡を発表したほか、「波浮の港」や「船頭小唄」などの民謡も数多く世に送り出している。大正デモクラシーの風潮と相まって、文化や教育の面でも自由主義が隆盛した大正時代から昭和初期にかけて、一世を風靡したと言っても過言ではない。

その雨情が最晩年を過ごしたのが、鶴田町の羽黒山麓に建てられたこの小さな家である。病が悪化したことをきっかけに、療養をかねて昭和19(1944)年に東京・吉祥寺から移り住んできた雨情一家は、細々とした農業で生計を立てながら過ごした。そしてほぼ一年後の昭和20年1月27日、雨情は終戦を待たずして静かに眠りについたのである。

宇都宮に移った頃には詩作もできないほどに体は衰えていたというが、それでも高名な詩人の来宇は、地域の人々から歓迎をもって受け入れられた。

ご子孫の手に、「宇都宮市外鶴田羽黒山麓」と記された名刺が残っている。その裏面には、「御道順」と題された地図が妻つるの手によって青いインクで描かれていた。住み慣れた吉祥寺の家を売り払ってまで鶴田の地に移住したのは、疎開という一時的なものではなく、この地で余生を過ごすつもりだったからではないか――。近代文学研究家であった



小さな名刺の裏面には、宇都宮駅から羽黒山麓までの道順が簡単に記されている(個人蔵)



子息の存彌氏は、そのように書き残している。この名刺の表裏に記された「鶴田羽黒山麓」の地名と地図は、雨情一家のそんな心づもりを表しているかのようだ。

児童が学ぶ音楽の授業でも、テレビやラジオからも、童謡らしい童謡はあまり聴かれなくなってきた。令和4年は、雨情が生まれてちょうど140年。「童心」、つまり子どもたちの自由な感性を理想とした雨情の、素朴でどこか郷愁を帯びた唄に耳を傾けてみていただきたい。コロナ禍で閉塞しがちな日常を、ふと和ませてもらえるはずだ。

あなたの本づくりをお手伝いします。

一冊のぬくもりを大切にしたい。

これが私たちの編集コンセプトです。

図書出版・企画・編集・制作

36th  
SINCE 1985  
随想舎

まずはお電話を ☎028-616-6605

<http://www.zuisousha.co.jp>

〒320-0033 栃木県宇都宮市本町10-3 TSビル

総務・営業部 [1F] TEL.028-616-6605 FAX.028-616-6607 編集・制作部 [2F] TEL.028-616-6606 FAX.028-616-6608 e-mail: info@zuisousha.co.jp